

日本イギリス哲学会関東部会第 88 回例会（2011 年 12 月 10 日、慶應義塾大学）

【報告要旨】

17 世紀イギリス道徳哲学における利己心の問題

柘植 尚則

近代イギリス道徳哲学において「利己心」（自己愛）は中心的な問題であり、17 世紀から 19 世紀にかけて、モラリストの多くがこの問題について論じている。ただ、17 世紀の議論は、18・19 世紀の議論に比べると、それほど注目されてこなかった。そこで、この報告では、17 世紀の議論を辿り、その特徴を明らかにしたい。

議論の出発点となったのは、周知のとおり、ホッブズの所説である。ホッブズは、人間の本性を利己的なものとし、「自己保存」を人間の主要な目的としたうえで、自己保存の追求が自然権であり、自然法の命じるものであると主張している。そして、自己保存をめぐる個人間の衝突を、国家の設立によって解決しようとしている。

それに対して、カンバーランドは、仁愛など、人間の利他的な本性を強調するとともに、万人の「共通善」が至高の自然法であると主張している。だが、自己保存を否定しているわけではない。自己保存の追求を自然権とすることには反対するものの、自己保存そのものについては、これを自然的な善として認めている。さらに、共通善の追求が個人の善の実現につながるとして、両者の一致を唱えている。

他方、ロックは、自己保存の問題を所有の問題として捉え直し、自己の生命・自由・財産に対する「所有権」が自然権であると主張している。そして、個人が所有権を行使することで、人類の共通の蓄えが増大すると論じている。ただし、所有権の行使に対しては、（人類の保存を命じる）自然法という制約を課している。また、所有権をめぐる個人間の対立を、政治社会の設立によって調停しようとするが、その政治社会が公共善をめざすものであることを強調している。

続いて、クラークは、人間の社会性を強調する一方で、自己愛を自然的なものとして認めている。そして、（神や他者に対する義務を果たすために）自己の存在を保存し、自己の欲求や情念を統制することが、自己に関する「義務」（正義の規則）であると主張している。さらに、人々が義務を遂行するためには、賞罰も必要になるとして、自己愛による義務への動機づけについても論じている。

最後に、シャフツベリは、人間には、個人の善に向かう「自己情愛」だけでなく、公共の善に向かう「自然的情愛」も存在すると主張している。そして、過度の自己情愛が自然的情愛を失わせ、個人を不幸にすると論じている。それでも、自己情愛は、自然的情愛に従う場合には適度なものであり、さらに、公共の善に資する場合には不可欠のものであるとして、その存在と意義を認めている。

利己主義者のホッブズや、ホッブズに近い立場をとるロックは、自己保存や私的所有を

権利とすることで、人間の利己心を正当化しようとしているが、利他主義者のカンバーランドやシャフツベリ、義務論者のクラークも、一定の条件のもとで、自己保存や自己愛を認めている。彼らの議論も利己心の正当化へと道を開くものであり、後世に少なからず影響を与えたと考えられる。

義務の概念をめぐって

—R.G.コリングウッドとオックスフォード実在論—

春日 潤一

20 世紀イギリス哲学における最初の 30 年間は、ある一面で、凋落する 19 世紀来の観念論と、20 世紀分析哲学の源流たる実在論の台頭という二軸の間の葛藤の歴史だったという見方もできる。この観念論と実在論の対立は、論理学や認識論はじめ哲学の広範な部門に及んでいた。よく知られているように、ケンブリッジでは G・E・ムアや B・ラッセルが現れていたし、オックスフォードにおいても、F・H・ブラッドリーや B・ボサンケらの観念論に対して、J・クック＝ウィルソン、H・A・プリチャードらが実在論を唱えて台頭していた。

こうした状況下で思想形成期を過ごした哲学者のひとりに、R・G・コリングウッド(1889-1943)がいる。彼は、ヴィクトリア期のオックスフォードにてグリーンやボサンケから影響を受けた父から受け継いだ観念論的傾向と、彼自身がオックスフォードで教を受けたクック＝ウィルソンやプリチャード、E・F・キャリットらの実在論という二つの系譜の交叉点にいた。しかしながら彼の哲学は、1930 年代以降の分析哲学主流化の趨勢のなかで、時代遅れのイギリス観念論の最後の生き残りとして大雑把に単純化して捉えられる傾向にあった。確かにこのような伝統的理解の一因には、彼の『自伝』An Autobiography (1938)における過激なオックスフォード実在論批判があったかもしれない。だが、コリングウッドの草稿などが研究者の目に触れるようになった 1980 年代以降、こうした伝統的理解を再考し、彼の哲学を再評価する研究が進んでいることも事実である。

現在、倫理思想史の文脈でも、コリングウッドの「論敵」であったオックスフォード実在論(直観主義)が再評価されつつある一方、コリングウッドに言及されることはなぜか余りない。しかし、報告者が彼の未公刊草稿を含めた著作を読み込むなかで見えてきたものは、『自伝』から受ける印象に反して、彼の道徳哲学がオックスフォード実在論者たちへの深い理解と濃密な議論に基づいた建設的批判を通して形成されたということであった。したがって本報告では、道徳哲学におけるコリングウッドとオックスフォード実在論(直観主義)の議論の焦点であった義務の概念に注目し、コリングウッドの道徳哲学を再構成することを目的としたい。